

なし黒星病菌の越冬量が多くなる予想

～ 次作に向けて秋期防除を徹底してください ～

1. 現在までの発生状況と今後の発生予想

巡回調査（8～9月の各月中旬）における黒星病の新梢葉での発病状況は、9月の発病葉率が平年並で同地点率がやや低かったが、8月の発病葉率、同地点率とも高かったことから、9月から10月の降雨によっては、越冬伝染源が多くなると予想される（表-1）。

9月21日に秋田地方气象台から発表された旬の気象概況によると、9月中旬の降水量（秋田観測所）はかなり多かった。また、9月21日に仙台管区气象台から発表された東北地方1か月予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予報されている。

以上のことから、越冬伝染源となる秋型病斑（図-1）及び芽りん片（図-2）での病斑が増加すると予想されるため、防除対策を実施する必要がある。

2. 防除対策

1) 薬剤防除

- ・芽りん片病斑は翌年には果そう基部の病斑（図-3）となり、葉や果実への伝染源となる。芽りん片への感染を予防するため、表-2から薬剤を選択し、落葉期（落葉始めから80%程度落葉頃まで）に2回散布する。
- ・スピードスプレーヤーで防除する場合は全列を走行し、かつ低速で丁寧に散布する。
- ・園内に収穫前の果実がある場合は、収穫前日数が短い薬剤を選択する。
- ・スコア顆粒水和剤等のDMI剤（RACコード：3）、スクレアフロアブル等のQoI剤（同：11）、カナメフロアブル等のSDHI剤（同：7）は、耐性菌出現のリスクを増大させるので秋期防除には使用しない。
- ・収穫終了後に薬剤防除を行った場合、次作の使用回数としてカウントされるため注意する。

2) 耕種的防除

- ・発病葉や発病果は秋型病斑の伝染源となることから、園地に放置せず速やかに土中深く埋める。
- ・秋型病斑は翌年の伝染源となることから、積雪前に落葉を集めて焼却するか、ロータリー耕によるすき込み等の埋没処理を行う。焼却及び埋没処理ができない場合は、乗用草刈り機等で地面の落葉を粉碎する。

3. 資料

表-1 巡回調査(8～9月)における新梢葉の発病状況

	8月		9月	
	発病葉率	発病地点率	発病葉率	発病地点率
2023	0.3	60.0	0.1	20.0
平年	0.2	35.0	0.2	37.0
概評	多	多	並	やや少



図-1 秋型病斑



図-2 芽りん片の感染しやすい部位



図-3 果そう基部の病斑

表-2 なし黒星病の秋期防除の使用薬剤

RAC コード	農薬名	希釈倍数	使用時期	使用回数	各成分の総 使用回数
M3	チオノックフロアブル	500倍	収穫30日前	5回以内	ア
M3	トレノックスフロアブル	500倍	収穫30日前	5回以内	ア
M4・M1	オキシラン水和剤	600倍	収穫3日前	9回以内	イウ
M4	オーソサイド水和剤80	800倍	収穫3日前	9回以内	イ
M9	デランフロアブル	1,000倍	収穫60日前	4回以内	5回以内
M7	ベルコート水和剤	1,000倍	収穫14日前	5回以内	エ

ア：チウラム（5回以内（休眠期は1回以内）） イ：キャプタン（9回以内）

ウ：有機銅（12回以内（塗布は3回以内、散布は9回以内））

エ：イミノクタジン（5回以内（塗布剤は2回以内、液剤は1回以内））

【 問合せ先 】

秋田県病害虫防除所 TEL 018-881-3660

秋田県果樹試験場 TEL 0182-25-4224

天王分場班 TEL 018-878-2251

掲載HP <https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>